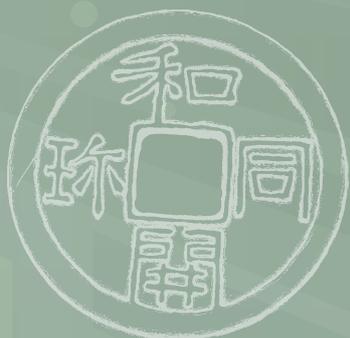
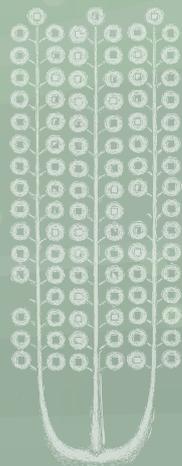


II

展示の「深化」と
コレクションの「真価」



展示の“深化”を図る

貨幣博物館は日本の貨幣だけでなく、日本の貨幣に関する古文書や絵画などさまざまな資料や東アジアの貨幣などを所蔵しています。

多様な資料の整理分類や調査研究を進め、その成果を企画展などを通じ公開してきました。



第7回企画展

黄金の分銅 —天下人の遺産—

2005年12月17日—2006年3月12日

キッカケ 2002年に古金銀貨(分銅金・甲州金等)を新規収蔵。

シンカのポイント 新規収蔵資料の調査を実施し、本企画展にて分銅金に関する研究成果を紹介。

展示風景



分銅金とは…?
大分銅の描かれたお金の図鑑



『国家金銀銭譜』
906415

まぼろしの大分銅

大分銅は実物が残されていないことから、実際の金の品位などは不明だが、史料から製作時期等がわかっている。

豊臣秀吉の大分銅

製造時期: 1591年、1597年
種類: 金の大分銅
制作者: 大判をつくっていた後藤家か

江戸幕府の大分銅

製造時期: 1604年、1659年、1793年、1842年
種類: 金銀の大分銅 *1604年は銀のみ
制作者: 大判をつくっていた後藤家

天保の大分銅

江戸幕府がつくらせた金銀の大分銅のうち天保期の大分銅について、絵や拓本からその概要を知ることができる。

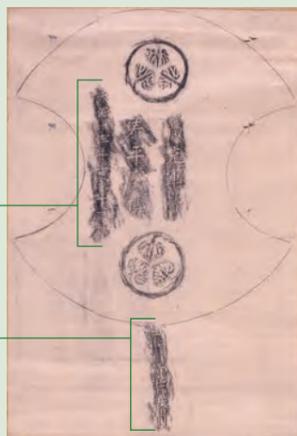
製造時期: 1842年

種類: 金3個、銀23個

制作者: 後藤四郎兵衛家(大判座) 16方方乗

大きさ: 縦約34cm 横約30cm

重さ: 約160kg
(大きさと重さは拓本より。資料による個体差あり。)



『幕府金法馬揚本』(拓本)
902017



『天保金分銅之図』
911028

拓本は1842年につくられた金の分銅3個のうちの一つ。実物の分銅は安政年間の貨幣改鑄で鑄つぶされた。

天保十三年壬寅十一月
蔵充軍資
泰平宝伝

四拾吉貫五百五拾目



第13回企画展

19世紀日本の風景 錦絵にみる経済と世相 —米国FRB美術品展示会より—

2017年10月14日—2017年12月3日

キッカケ 2014年秋に錦絵をFRB*に貸出。FRB・日本銀行の共催で展示会を開催。
*連邦準備制度理事会、米国ワシントンD.C.

シンカのポイント 貨幣・経済の観点で収集されたコレクションの特徴を示す錦絵(全46点)で構成。錦絵のみの初の企画展。



19世紀
日本の風景



小判が登場する歌舞伎舞台の一場面

初代歌川豊国
『着や喜三郎 坂東三津五郎』
1816年 900330

三代目坂東三津五郎扮する着や喜三郎が魚を捌いているところに、巾着をくわえた猫が屋根を通り、巾着から小判を落として届けている場面。2枚綴りのうちの1枚、『楼重嚙菊月』を題材にしているとされる。

米国FRBでの展示の様子
FRBの本館内



貨幣博物館での展示の様子



第14回企画展

江戸の宝くじ「富」 —攫千金、庶民の夢—

2018年12月1日—2019年2月24日

キッカケ 2016年より富くじの資料を整理・調査研究。

シンカのポイント 富くじに関する錦絵、道具や刷物など多様な資料を紹介し、富くじの実態を立体的に展示。調査研究の成果として、資料目録をHPで公開。

展示風景



江戸の宝くじ
「富」



第15回企画展

フカボリ! 金銀山×お金の世界

—絵巻でよみとく金銀山のいとなみ—

2021年12月10日—2022年3月6日

キッカケ 佐渡金銀山の絵巻を新規収蔵。

シンカのポイント 貨幣館コレクションおよび新規収蔵資料より、金銀山関係の絵巻を初公開。一部の絵巻の高精細画像を当館HPで公開。

展示風景



フカボリ!
金銀山×
お金の世界

コレクションの“真価” 中国のお金とつくり方

金属貨幣



農具が変化 布幣(空首布)〈画像右〉と鑄型

春秋・戦国時代 950050, 950049, 1595

中国や日本の貨幣は、鑄型に溶かした金属を流し込む「鑄造」技術でつくられた。布幣は、古代の農具から発展・変化した青銅製の貨幣。「空首布」と「平首布」の2種類に分けられる。

青銅製の農具や小刀などの器物は、王侯貴族の間で贈与の対象となり、周時代にはそれらが変化する形で金属貨幣となった。

空首布:

西周末期・春秋時代、周王朝および晋・宋などでつくられた。

平首布:

戦国時代、韓・魏・楚などでつくられた。

平首布
1600



刀型の貨幣 刀幣(画像右)と鑄型

春秋・戦国時代 950054, 950053, 1619

刀幣は、木簡や竹簡に誤って書いた文字を削る際に用いた「削」と呼ばれる小刀が発展・変化した青銅製の貨幣。春秋・戦国時代の燕・斉・趙等で作られた。



軽くて小さな半両錢 榆莢錢(画像右)と鑄型

前漢時代 950099, 1693

榆莢錢は、重さ1gにも満たない小型で軽量の半両錢。植物の榆のさやのように小さく、薄いことから名付けられた。戦国時代の秦がつくった半両錢は、秦滅亡後も前漢時代まで引き継ぎつくられた。

中国の金属貨幣の鑄型には、石・土・銅などが使われていた。貨幣の鑄型の真上には湯口(銅を鑄型に流し込む口)がつくれ、湯口から貨幣の鑄型へと直接金属が流れ込むつくりとなっていた(縦式鑄型)。日本においても、錢貨は古代からこの方法でつくられていた。

第9回企画展図録「貨幣誕生」p24~27



紙幣



元でつくられた紙幣(鈔)の原版

至元通行宝鈔2貫文の原版 1287(至元24)年 952192

モンゴルが金と南宋を滅ぼし、建国した元(1271~1368)は、金・銀・銭貨の貨幣としての使用を禁止し、紙幣を唯一の貨幣とする政策を進めた。元時代の紙幣の印刷には、木版からのちに銅版が使われた。



原版から作成したイメージ

明でもつくられた紙幣

大明通行宝鈔 1貫文 1375(洪武8)年 504332

明(1368~1644)は建国当初、銭貨を唯一の貨幣とすることを旨としたが、原料の銅の不足で実現せず、紙幣を発行した。

偽造者は死罪、偽造の密告者には褒賞が与えられること等が記されている。



これまでの中国貨幣をテーマにした展示

東洋貨幣に関して世界的にも充実している銭幣館コレクションを活用して、これまで様々な角度から中国貨幣について展示を行ってきた。

第6~9回テーマ展 2000~2001年度開催

中国のお金の歴史 ①~④

中国貨幣のはじまり / 中国銭貨の2000年の歴史 - 「秦」から「清」まで / 金・銀と紙幣からみた中国貨幣史 / 中国近代貨幣史 - 19世紀後半(清末)~20世紀前半

第31回テーマ展 2007年度開催

2500年の伝統と技 - 中国の鑄銭技術 -

第34回テーマ展 2009年度開催

中国貨幣のはじまり - 物品貨幣から金属貨幣へ -

第36回テーマ展 2010年度開催

中国銭貨の2000年の歴史 - 「秦」から「清」まで -

第58回テーマ展 2023年度開催

中国貨幣の世界 - 開元通宝までの道 -

コレクションの“真価” お金に描かれた神様とドラゴン

第8回企画展 2006年度開催

お金と福の神

—お札に描かれた大黒様—

大黒や恵比寿などの福の神が描かれたお金(絵銭)や、お金と福の神と一緒に描かれた錦絵などを紹介した。



福寿七福神 916 裏



分銅七福神 916 裏

福神の絵銭

福德の神とされる「恵比寿 大黒 毘沙門天 弁財天 福祿寿 寿老人 布袋」が描かれた絵銭。



お多福大黒 909 顔がふっくらしている大黒
下げ槌大黒 909 手に持つ槌が下がり気味の大黒
一俵大黒 909 大黒の下に俵が一つ
玉踏大黒 909 大黒の左右の足の下に宝珠

大黒の絵銭

大黒は、元はインドの神で、日本では大国主神と習合し、福德の神として信仰された。頭巾をかぶり、左肩に大袋を背負い、右手に打ち出の小槌を持ち、米俵の上に座る姿で描かれる。



肥り恵比寿 909 ふくよかな恵比寿
釣恵比寿 909 鯛を釣り上げている恵比寿
歓喜恵比寿 909 鯛を釣って喜ぶ恵比寿
両面二神 909 表・裏に大黒・恵比寿の図

恵比寿の絵銭

恵比寿は、漁村では大漁の神、農村では田の神とされる。狩衣姿に風折烏帽子をかぶり、右手に釣り竿、左手に鯛を抱えた姿で描かれる。

絵銭は江戸前期頃から開運招福のお守りや玩具、装飾品として作られた。
銭の形(☉)に七福神などの福神や縁起物がデザインされている。



穴一銭 911 裏に「一」の字



鏡屋銭 913 裏面が鏡のようにつるつる

おもちゃの絵銭

めんこ、石けりなどの子どもの遊びに使われたとされる。



飾るための絵銭

鋳物職等の輪祭りで飾るなど、東北地方の室内装飾品だったもの。

1419

福の神が描かれた売薬版画

売薬版画は、江戸後期から明治時代にかけて、富山の薬売りにより得意先へ「おまけ」として配られた。版画のデザインには大黒や恵比寿が多く描かれた。



茶釜金の山吹 900860

第61回テーマ展 2024年度開催

カハイハクでドラゴンをさがせ!

—2024夏・こどもと楽しむ昔のお金—

ドラゴンが描かれた明治時代の金貨とその下絵や、お札などを紹介した。

干支の辰年に合わせて夏休み期間に開催し、親子で楽しめる内容とした。

ドラゴンとは?

想像上の生き物。水を支配して、水にもぐったり、空に上ったり、雲を巻き起こして、大雨を降らすことができる。



神ワザ!ドラゴンの下絵(10円金貨)

「新貨原型図案集 元」加納夏雄
1870年頃 902013

明治政府からお金のデザインを依頼された加納夏雄とその弟子が描いた下絵案の一枚。今にも動き出しそうなほど生き生きとしたドラゴン(竜)が筆で描かれている。ドラゴンの下絵は14枚ほどあり、ドラゴンの表情や描かれ方が少しずつ異なっている。



ドラゴンの金貨

10円金貨 1871年 1119



ドラゴンのお札

新紙幣「明治通宝札」50円
1872年 500383

明治時代の新しい制度のもと発行されたお札。「明治通宝」の文字の両脇にドラゴンがとても細かい線で描かれている。

下絵にみるドラゴン

「新貨原型図案集 元・享・貞・利」のコインの下絵を見ると、ドラゴンの図案を何通りも描き、何度も修正を加えたことがわかる。



10円下絵

「新貨原型図案集 享」より 902014

朱色でドラゴンを直している。



20銭下絵

「新貨原型図案集 元」より 902013



4分の1円下絵

「新貨原型図案集 元」より 902013



4分の1円下絵の修正

「新貨原型図案集 利」より 902016

ドラゴンをデザイン・彫刻した加納夏雄とは？

明治時代を代表する金工家・加納夏雄とその弟子がドラゴンのコインのデザインから型の彫刻まで携わった。その出来はお雇い外国人からも賞賛されたほどであった。

年齢	西暦	加納夏雄の略年譜
0歳	1828年	京都で生まれる
11歳	1839年	金工の基礎を学びはじめる(師匠:奥村庄八)
12歳	1840年	金工の技術をより深く学ぶ(師匠:池田孝寿) 絵画や漢文など有名な先生について学ぶ
18歳ごろ	1846年ごろ	独立し、京都で金工の仕事始める
26歳ごろ	1854年ごろ	江戸(現在の東京)に移り金工の仕事続ける
41歳	1869年	政府の依頼を受けて弟子たちと大阪の造幣寮へ 20円金貨などのデザインをし、型を彫る
44歳	1872年	再び、造幣寮でコインのデザインをし、型を彫る
62歳	1890年	東京美術学校の教授となり、帝室技芸員となる
69歳	1898年	東京で亡くなる

金工とは金属を使ってつくる工芸品、金工家はその職人のことだ。



10分の1円下絵

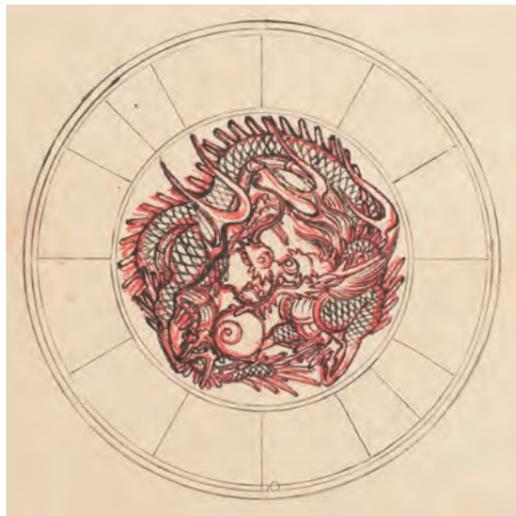
「新貨原型図案集 元」より 902013



10分の1円下絵の修正

「新貨原型図案集 利」より 902016

様々なタイプのドラゴンの下絵に対して、細かな修正の跡がみられる。

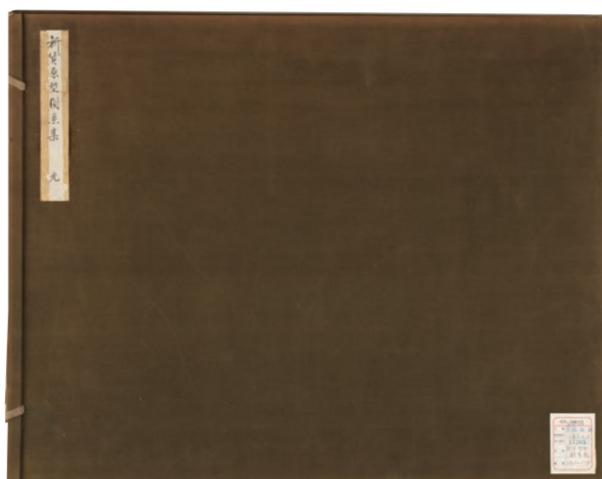


以上4点「新貨原型図案集 享」同一の台紙より 902014



1銭下絵

「新貨原型図案集 貞」より 902015



「新貨原型図案集 元」の表 902013

コレクションの“真価” お金にまつわる本と版木

第46回テーマ展 2018年度開催

おかねをめぐる物語

—江戸の文芸とユーモア—

江戸時代の人々が抱いていたお金へのイメージやお金との関わりについて、当時のマンガともいえる挿絵入りの小説より紹介。

絵入り小説とは

江戸時代後期に知識人が書いた絵入り小説等をいう際に「戯作」という言葉が使用され、新しい様式の小説(洒落本・滑稽本・黄表紙・合巻・読本・人情本)の総称となった。このような小説群の作者は、戯作者とよばれた。



お金をめぐるありがたい話

十返舎一九 作・画 黄表紙『替銭通用双六』1796年 904496, 904500

律儀な正すけと隣家の高利貸し邪九郎とお金をめぐる物語。

STORY

正すけは、邪九郎から銭を借りたが、利子が増え家財全てを取り上げられた。正すけは、神仏からお金を無駄にしない教えを受けてお金を増やす一方、邪九郎は無理に金儲けをした報いで、銭から逃げられ落ちぶれていった。

黄表紙：江戸時代後期(1775-1806年頃)に黄色の表紙で多く刊行された大人向けの絵入り小説。内容はしゃれ、滑稽、風刺をおりませたものが多かった。



擬人化されたお金たちのさまざまな性格を紹介

東里山人 作 勝川春扇 画 合巻『宝船黄金枕』1818年 904487

世の中のお金のさまざまな性格が紹介された合巻。「飛脚の金」、「人の命を奪う金」、「世間知らずの金」、「浮世を捨てた金」などが紹介される。

STORY

中央上にある小判の顔をした版元が、作者・筆耕・画工(絵師)・版木師・版摺を統括する。江戸時代の出版事情をよく表している。

江戸時代中期以降、読者層が拡大したことで本の出版は盛んになり、ベストセラー作家も登場し、版元は大きな利益をあげた。



STORY

飛脚の金は、脚が速く、常に股引・草鞋で世界を駆け巡るため、片時も人の家に座らない。このような金は、家の内へも上らず入り口からすぐに、おいとますという。

合巻：江戸時代後期(1807年以降)に流行した絵入り小説。黄表紙を数冊合わせたものであることから「合巻」とよばれた。

版木からみた江戸・明治期の錢譜

江戸・明治時代のお金の図鑑(錢譜)とその版木を紹介。錢譜は貨幣に関する情報や知識が人々の間で共有される契機となった。

錢譜とは

錢譜は、錢貨を中心とした貨幣図鑑・参考書。江戸時代以降、学者や収集家によって進められた貨幣に関する研究の成果としてまとめられた。

一枚板に彫り込んだ版木から作られ、出版された。

江戸時代のお金の図鑑の版木

大村成富 著『珍銭奇品図録』1817年 906148
『珍銭奇品図録』 版木 963090

珍銭・奇銭と認識されていた貨幣を古文銭(隋以前の錢貨)、平銭(開元通宝以後)、折二銭(二文銭)などに分類し、簡単な解説文と図をつけた錢譜の版木。図録の巻末に版木を彫った「彫工鈴木栄治郎」の名前がある。

江戸時代、書物の主流は筆書きによる写本形式から木版による印刷形式へと変わり、大量生産が可能となり、販売されるようになった。版木は、手彫りのため製作に手間がかかるが、良い状態で保管することで、再版が容易であった。そのため、江戸時代の錢譜は、その版木を用いて明治以降も再版された。



片面で1丁、表裏あわせて2丁分が彫られている。
4丁張(片面で2丁表裏で4丁分)の次に一般的な形式。

江戸時代の出版

17世紀半ば、幕府・寺社などの庇護を受け、京都において出版業がなりたつようになった。その後大坂へも広がり、元禄期には浮世草子や日常生活に関する本も刊行され、上層庶民

も読者となっていった。

18世紀半ばから出版の中心は上方から江戸へ移り、19世紀になると読者が中下層の町人、職人層など庶民大衆まで拡大した。

明治時代の古代錢貨図鑑と版木

中川近礼 編『新撰皇朝錢譜』1899年 906316
『新撰皇朝錢譜』 版木 963122

古代錢貨についてまとめた錢譜の版木。明治時代には、様々な貨幣に関する分類の詳細化が進むなかで、このような特定の種類の貨幣を対象とする専門的な錢譜が多く出版された。

明治時代前期は、木版印刷でつくられることが多く、版の彫り方や色使い等で実際の貨幣を再現する工夫がみられた。また、明治時代には新たな技術として石版印刷や活字を用いた活版印刷も用いられるようになった。



絵入り小説の作者と画工(絵師)

絵とセリフを作者自身が描いていく場合と、別の画工に頼んで描いてもらう場合があった。

作者自身が描く



山東京伝 作・画
『江戸春一夜千両』
山東京伝の別名
北尾政演
904492



十返舎一九 作・画
『新鑄小判耳たぶ』
904497

絵師が描く

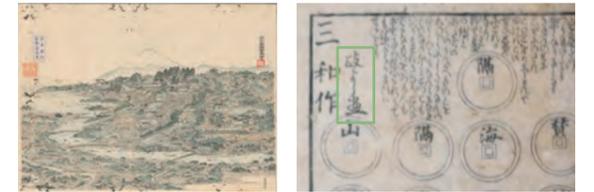
歌川豊国が描いた作品



山東京伝 作
歌川豊国 画
『平坂名銭神問答』
904474

900330

北尾政美(敏形蕙齋)が描いた作品



唐来参和 作 北尾政美 画
『再会親子銭独楽』
904504

902442

版木の構造と工夫

版木の劣化・破損や、版の改訂が必要な場合は、該当部分に板を埋めこむ(入木・埋め木)などにより、版木を再使用した。墨は、防虫効果があったとされ、版木には、版面以外の箇所もすべて墨が塗られている。未使用の版木で墨が塗られている事例もある。

また、江戸時代、版木には次の理由から桜が多く使用された。版木の材質に桜が選ばれた理由として、①文字が彫りやすく、仕上がりがきれい、②墨の着色性に優れている、③時間が経つにつれて硬くなり、狂いが少ないため耐久性に優れている、といった点が挙げられる。



いれき
入木

版木は、入木・埋め木により部分的に修正する。版元が変わった場合、新刊に見えるよう書名を変更する場合もあった。
963108



はしほみ
端喰

版木を重ねた際に版面が傷つかないように工夫したもの。
963105

貨幣博物館の資料が他館でも活躍

希少な資料については、他の博物館から貸出や複製作成の要望が寄せられることがある。国立歴史民俗博物館や九州国立博物館などでは、貨幣博物館の人参代往古銀の複製(レプリカ)が活用されている。

国立歴史民俗博物館の展示より(常設展示 近世)



▲ 触れる展示 2025年

朝鮮人参輸入のためにつくられた銀貨 人参代往古銀

1710年 594

対馬藩が朝鮮より輸入していた、薬用の朝鮮人参の支払いのためにつくられた銀貨。

朝鮮人参は、品位の高い慶長丁銀(銀80%)で支払われていたが、その後発行された宝永二ツ宝丁銀は品位が低く(50%)、朝鮮より受取を拒否された。そのため、幕府は慶長丁銀と同じ品位の良質な銀貨「人参代往古銀」をつくり、支払いに充てた。

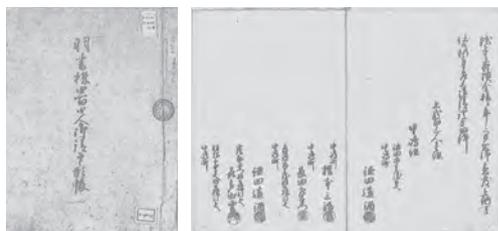
往古:昔という意味。つまり古い慶長丁銀のことを指す。



山田羽書文書類・藩札データベースの紹介

貨幣館資料には日本で最初の紙幣といわれる、「山田羽書」に関する古文書も多く含まれている。『日本銀行所蔵貨幣館古文書目録』(2000年)には「IV札・紙幣(1)宇治山田・山田羽書」の項目があり、古文書の画像は当館ホームページで公開している。

その一部について翻刻史料集『山田羽書関係史料』(1)～(3)(2008,2010,2012年)も刊行している(目録、翻刻史料集ともホームページに掲載)。



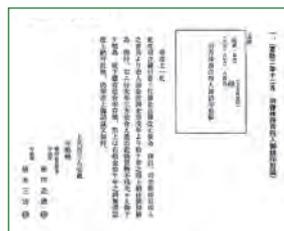
『羽書株四百人御請印帳』 908601



貨幣博物館HP 調査研究資料
▶所蔵資料目録
▶古文書(冊子・一紙・卷子・絵図)
▶4札・紙幣 1宇治山田・山田羽書



貨幣博物館HP 調査研究資料
▶所蔵古文書翻刻
▶山田羽書関係史料(1)～(3)



翻刻史料集『山田羽書関係史料(1)寛政期羽書改革の記録』(2008年)より



日本で最初の紙幣?!
伊勢山田羽書
17世紀はじめ
511370

貨幣館資料には山田羽書の印形も含まれている。山田羽書以外にも江戸時代の紙幣やその原版が多く含まれており、それらの情報は「古貨幣・古札統合データベース」にてWeb公開している(2019年～)。



古貨幣・古札統合データベース
(東京大学経済学図書館)
画像は早稲田大学リポジトリにて公開



山田羽書の印形
大黒像と「丁銀」
952015